

第99回 日文研フォーラム



『菊と刀』のうら話

Behind the Scenes of “The Chrysanthemum and the Sword”



ポーリン ケント

Pauline KENT

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

『菊と刀』のうら話

Behind the Scenes of "The Chrysanthemum and the Sword"

● 発表者 ●

ポーリン ケント
Pauline KENT

龍谷大学助教授
Associate Professor, Ryukoku University



1997年9月9日(火)

発表者紹介

ポーリン・ケント

Pauline Kent

龍谷大学助教授

Associate Professor, Ryukoku University

出身地：オーストラリア

- 1986年3月 千葉大学文学部（社会学専攻）卒業
1988年3月 大阪大学大学院学術修士号取得（社会学専攻）
1989年9月 大阪大学大学院博士後期課程退学
1989年10月 国際日本文化研究センター 研究部助手
1996年4月 龍谷大学国際文化学部助教授

論文・著書

Ruth Benedict's Original Wartime Study of the Japanese
International Journal of Japanese Sociology, 3 (1994): 81-97.

「解説2 ルース・ベネディクトの人生と学問」

『日本人の行動パターン』173-211頁、NHKブックス、1997年4月

「解説 *Race: Science and Politics* とルース・ベネディクト」

筒井清忠・寺岡伸悟・筒井清輝 訳『人種主義 その批判的考察』

201-224頁、名古屋大学出版会、1997年8月

◆はじめに

私が初めて『菊と刀』を読んだのは大学四年生の時でした。西洋社会の「罪の文化」と日本社会の「恥の文化」の比較をしたらどうかと指導の先生に言われて、『菊と刀』を卒業論文の出発点にしたのです。卒業論文では宗教および文学の観点から罪と恥の比較をし、大学院では中世イギリスにおける罪と恥の意識を調べましたが、『菊と刀』はメインテーマではありませんでした。

しかし、日本では「恥の文化」といえばどうしても『菊と刀』を連想してしまい、「それじゃ、ルース・ベネディクトってどんな人でしたか」とか、『菊と刀』について質問されても返答できないことが恥ずかしく、ルース・ベネディクトや『菊と刀』について研究するようになりました。調べていくうちに『菊と刀』の裏にある研究状況もわかってきましたので、ここではベネディクトという人を紹介しながら、彼女が戦争中にどのように日本のことを研究したかをクリアにしたいと思います。

◆ルース・ベネディクト

資料（付録一）には、ベネディクトの経歴と主な研究業績が書いてあります。

それを見ていただきますと、ベネディクトは文化人類学者で、名門コロンビア大学でずっと教えていたことがわかります。日本ではほとんど『菊と刀』を書いた人としてしか知られていないのですが、実は文化人類学者として大変な影響力のあった人で、それだけ活躍していたからこそ『菊と刀』を書く機会が与えられたとも考えられます。この点が日本ではあまり知られていませんので、ベネディクトという人をまず紹介しましょう。

ルース・ベネディクトは、一八八七年六月五日、ヴィクトリア時代に生まれた女性です。日本で言う明治二〇年生まれ的女性です。こんなに有名な著作だからベネディクトというのは、当然男性であると考えられる日本人が多いのですが、これは偏見です。また、家柄がよく上品な人だったようです。祖先はメイフラワー号でアメリカに最初にわたってきた熱心なバプティストの一人でした。祖父やおじは牧師でしたが、幼いルースにとって、この人たちがあれだけ熱心に説教するわりに、やることと言うことが時々一致しないのは何故だろうかと考えることがあったようです。

母親は当時の女性としては珍しく、名門ヴァッサー女子大で大学教育を受けています。この大学では多くのアメリカのお嬢さんたちが教育を受けてきました。

元大統領夫人のジャッキー・ケネディから女優のメリル・ストリープまで最近だけでなく多くの有名人が卒業生にいます。また日本とも縁がありまして、津田梅子とともに明治時代最初の女子留学生だった山川捨松（後の大山巖夫人）がこの大衆を卒業し、日本の女性として初めて海外で学位を取っています。後にルースも妹と共にヴァッサーで勉強するようになりますが、これについては後でふれます。母親はこのように大学を出ていたのでインテリとも言えるし、教育熱心な人でした。母親は結婚して二人の子供をもうけ、また父親は当時の医学界（ホミオパシー）で若きホープとして期待され実験的にいろいろな手術の可能性を探っていました。しかし、当時は手術技術やその衛生状態についてあまり知られておらず、ある時、注射針から逆に傷を負い細菌が体に入って父親は病気になる、カリブ海の暖かい島へ行ったりした保養のいかにもなく、ルース二歳、妹マージェリー生後二ヶ月の時に亡くなります。

父の死後、幼い子供二人は母親とその実家で生活します。これはニューヨーク州の北の方にある牧場でした。そこに祖父母、母の兄妹など親戚が大家族で生活していました。後にルースは学校に入る時に身体検査を受け、初めて難聴ということがわかるのですが、それまで家族の中では、あまり返事をしないむずかしい

子だと思われていました。それと比べて、妹のマージェリーの方は明るく、お手伝いもよくするかわいい女の子だったようで、ルースとは対照的な存在でした。

耳がよく聞こえないルースにとって大家族は非常にうるさいもので、誰が何を言っているのかよく区別のできない環境でした。彼女はなぜ自分が悪いのか、どうして妹だけがかわいがられるのか、などの疑問を小さい時から抱くようになります。

母親がインテリだったことが救いになったのかも知れません。母親は再婚せず、自分の家族を養おうと決め、子供を連れて実家から離れ、教員や図書館員をして生活費を稼ぎました。そしていい学校を選んで働きましたので、子供たちはそこに安く入れてもらえました。決して裕福な家庭ではありませんでしたが、いわゆるお嬢さん学校に通うことができました。また、難聴の問題がわかると母親はルースに作文を書かせ、それを読んだ母やおじが誉めたことで、ルースは書くことによって自分を表現できることがわかってきます。作文の他に彼女は詩にも興味を持ち、心の本質的な部分を文章で表現して聞こえないフラストレーションからある程度解放されるようになります。このようにルースにとって文章で情報の本質を正確に伝えることが大変重要で、若いときから「書くこと」の技術にも気を配りました。これは後の研究の成果に大きな影響を与えることになります。たとえ

ば、『菊と刀』は翻訳ではわからないかも知れませんが、原文の文章、それから構成が非常によくできています。やはり、難聴というハンディを抱えていたので書くことに大きな力を入れ、そのために文章がコンパクトで読みやすいものになったのではないかと考えられます。

母親のおかげでルースとマージェリーはよい学校でよい教育を受け、優秀な成績で高校を卒業し、二人同時に奨学生として一九〇五年にヴァッサー大学に入學します。転校しているうちに年齢の異なる二人は同学年になっていたのです。ヴァッサーでルースは文学を専攻し、ファイ・カップ・ベータ（最優秀の成績）で一九〇九年に卒業します。妹は大学で社会活動（ボランティア）によく参加し、活動中に若い牧師さんと恋をし卒業後すぐに結婚してカリフォルニアに引越します。ルースは卒業後一年間、二人のお金持ちのお嬢さんとヨーロッパを旅行することになります。これは成績優秀なルースに「足長おじさん」が留学とホームステイの十二ヵ月旅行をプレゼントしたもので、相変わらず裕福でなかったルースには貴重な機会となりました。ヨーロッパでルースは初めて異文化と出会いますが、小さい時から自分の行動がいけないとか、いろいろな悩みを抱えていたのですが、ヨーロッパに行ってみたら、違うやり方や価値観など自分が育った環境とは異なる

る文化があることがわかりました。それまで他人と自分が一致しないことになん
となく負い目を感じていたのですが、必ずしも間違っているわけではないという
ことに気づき、自分に自信をもてるようになってアメリカに帰ってきたのです。

帰国後は社会活動などをしていましたが、母親と共に妹のいるカリフォルニア
に引越し、文章の好きな彼女は高校の英文学の先生になりました。そして、一
九一三年の夏休み、久しぶりに祖父母のいるニューヨーク州の牧場に帰ったとき、
ヴァッサー大学時代の友人のお兄さんだったスタンリー・ベネディクトに紹介さ
れて恋に落ち、翌年結婚しました。彼はコーネル大学の優秀な化学研究者でした。
二人は新居をニューヨーク市郊外におき、彼女は専業主婦になります。しかし、
子供を作るとルースの体に危険があるとわかり、スタンリーは子供をあきらめま
した。ルースも専業主婦だけでは満足できず、再び「書くこと」に挑戦し始めま
す。詩はもちろんです、当時のフェミニストについても研究し、出版はかない
ませんが、かなりの成果をおさめています。さらに勉学への意欲をわかせて、
当時開講されたばかりのニュー・スクール・フォア・ソーシャル・リサーチ
(社会科学系の大学)に聴講生として通い始めました。そこで彼女は人類学という
当時の新しい学問を学ぶことになりました。彼女のすばらしい才能に気づいた教師

は、さらにルースを、コロンビア大学教授で後に文化人類学の父とも言われたフランズ・ポアズに紹介しました。ルースは彼のもとで大学院生として研究を続け、なんとわずか三セメスターというはやさで博士論文を書きあげたのです。

◆マーガレット・ミード

博士号を収得した後、ルース・ベネディクトはポアズの助手になりました。となりのバーナード女子大でポアズが非常勤講師をするのを手伝いに行くことになり、そこで授業をとっていた若いマーガレット・ミードと出会います。ミードはやがてコロンビア大学の大学院に進み、博士論文のためにサモアで調査を行い、その研究で一気に有名な文化人類学者になりました。当時の一九二〇～三〇年代のアメリカにおいて「セックス」というトピックはタブーで、セックスを初めて意識するようになる思春期は青年にとって葛藤の時期と考えられていました。しかしミードは、サモアの若者が自由にセックスに慣れる環境におかれ、アメリカの若者のようにセックスや結婚について罪の意識や悩みを抱えることがないことを報告しました。これはアメリカ中で話題になり、ミードはよく講演を行ない、また研究の一環として女性の社会的地位についても論じ、初期のフェミニストと

して大変な活躍をしました。

結果的に、ミードは大変有名になりましたが、そのミードはベネディクトとも初期の文化人類学の発展に大きく貢献し、セットとして考えられているようです。後に、ミードはベネディクトの伝記を二冊書いており、それを読まなければベネディクトを語る資格はないといっても過言ではありません。二人は終生、同僚であると同時に親友でもありました。しかし、ミードはベネディクトとあまりにも親しかったため、伝記にすべてを書くことができませんでしたし、個人的な情報がある程度避けざるを得ませんでした。その上、『菊と刀』の時代に関して言えば、ミードが子供を産み、さらに戦時中のイギリスに出張したり政府の委員会等の仕事で大変多忙な毎日を送っていたので、ミードはベネディクトの戦時中の研究についてそれほど詳しくないようです。したがって彼女が描いたベネディクト像には一種のバイアスがかかっているといわざるを得ません。

ミードにとってベネディクトはあこがれの対象だったために、いいところ、特に詩人のベネディクトを強調する傾向がありました。ベネディクトは詩を書くのが上手で雑誌にも載ったことがありましたが、ミードは大学時代から詩を書くことが好きでもそんなに才能があったわけではないようです。それでも、伝記では

ベネディクトの「詩人的」な才能を強調することによって、自分にも詩を書く才能が少しあったことをアピールしようとしています。やがてこの少しオーバーに紹介されたベネディクトの趣味が日本で誤解を招くことになります。

一九八一年に津田塾大学教授ダグラス・ラミス氏が、ミードの伝記にもとづいて『菊と刀』は「詩人ベネディクト」によって書かれたものだとし、直感的に書かれたとか政治文学だとかいって批判していますが、これは間違った解釈だと考えられます。残念ながら、彼の著書『内なる外国「菊と刀」再考』は多くの日本人によって読まれ高く評価されていますが、やはり元のデータを提供したミードにだまされていると私は思います。

◆ミードとベネディクトの関係

ベネディクトとミードは対照的な二人で、まずベネディクトはミードより十五も歳上です。それからベネディクトは背が高くスマートでスポーツも上手で、非常に穏和でシャイな性格の持ち主でした。いろいろな人がベネディクトについて書いていますが、必ず書くことは彼女が美人だったということです。これと比べて、ミードは背が低く、スポーツをできるだけ避けるタイプでした。出しゃばり

で、話題の中心となることが大好きなタイプでした。また、私が読んだものの中では、美人の「び」の字も見つきりません。とにかく、二人の関係は非常に面白く、最初は学生と先生の関係から始まり、次にミードもコロンビア大学の大学院に進み博士号をとると、ベネディクトと一緒に仕事をようになります。博士号をとるまでミードはベネディクトのことを必ずミセス・ベネディクトと呼んでいました。が、学位を取ってからはファースト・ネームで呼び合います。友人それから同僚という関係になり、伝記ではミードも秘したままですが、一時的に同性愛の関係を結びます。ミードはいつでもいろいろな人と関係をもちたいタイプで、三角関係も少なくなかったようです (Caffrey, 1989: 201-202)。ミードは三回も結婚しましたが、ベネディクトの場合、スタンリーとうまく行かなくなり、一九三〇年に別居しますが離婚しません。やがてスタンリーは一九三六年に若くして亡くなります。生涯でベネディクトは二人の女性と生活を共にしますが、まず自分より若い人、そして別れてしばらく後には心理学の専門家と一九四〇年頃から一緒に住みます。これも次々とパートナーを変えたミードとは対照的に、長く安定した関係でした。

五〇年代のアメリカで二人の同性愛を明らかにしたらミードの社会的評判はが

た落ちだったに違いなく、ミードも秘密を明かさないうちに、たとえば詩によって結ばれた関係のみを強調しています。したがって、ミードが書いているものをそのまま鵜呑みにはできません。ミードの伝記を拠り所にするラミスの著書も注意して読む必要があります。ラミスの議論を要約すれば、ベネディクトは詩人と人類学者の二重人格者であり、優位となった「詩人の人格」がその理想を日本文化に投影しようとするあまり、データを操作して日本文化論をつくりあげた、それゆえ『菊と刀』は非学問的な、アメリカ流デモクラシーのプロパガンダにすぎないというのです。しかし、詩人の理想「日本文化」と政治的文学『菊と刀』との関係は不明確で、ラミスが根拠としているデータこそ、かなり恣意的に操作されています。そもそもラミスは、ベネディクトの残した一次資料を用いず、マーガレット・ミードがベネディクトの遺稿を編纂したものを「孫引き」しているに過ぎません。彼は、ミードが強調したベネディクトの若い時代すなわち「詩人としてのベネディクト」に関する部分をピックアップし、『菊と刀』等を執筆した晩年のベネディクトに関する部分は無視しています。若い時代からベネディクトと同性愛を含めて親密な関係にあったミードによるベネディクト論のバイアスに、ラミスはまったく気づいている様子がないのです。

◆ベネディクトの業績

ベネディクトの話に戻りますと、ベネディクトは小さいときから難聴などいろいろなことについて悩みました。そして、同性愛者に対する社会のタブーについても考えさせられます。また当時は女性であるだけで、仕事をもったり昇進することはむずかしかったのです。ベネディクトはさまざまな差別や価値観の違いに直面していたからこそ、文化人類学者としてさらに深い理解力を得たのではないかと思います。さて、ベネディクトは博士号をとってすぐにポアズの助手になりましたが、別居するまでは夫の収入があるということで、ポアズは彼女を専任教員として雇いませんでした。一九三〇年に別居して、ようやく専任講師になり仕事に拍車がかかります。論文を次々と発表し、一九三四年に文化人類学では古典となった『文化の型』を出版します。これは今でも人類学では大学のテキストとしてよく使われるもので、これは文化概念についての考えに大きな影響を与えました。

やがて、ヨーロッパの方で第二次大戦が始まり、ヒトラーは人種主義的なプロパガンダをもとにユダヤ人や障害者、黒人、同性愛者を虐殺します。ユダヤ人のポアズはすでに一九三三年からいろいろな反対運動をやっていました。彼は人種

とは何か、人種は文化とどう異なるかについて論文集『人種、言葉と文化』(Race, Language and Culture, 1940)を出版しましたが、これは学問の世界ではともかく一般読者にほとんど読まれませんでした。以前より、彼は自身の限界とベネディクトの文章の才能をよくわかっていたので、誰でも読める人種に関するわかりやすい本を書くように頼んでいました。ちょうど大学の方ではすでに引退していたボアズの後任の主任教授の人事を行っている時でした。ベネディクトが二年も主任代理をやっていたのに、女性ということ、シカゴ大学からラルフ・リントン(男性)を迎えることになり、それに不満なベネディクトはサバチカル(研究休暇)を取り、『人種主義 その批判的考察』(Race: Science and Politics, 1940)を執筆したのです。ベネディクトは、主任代理になった一九三七年に準教授に昇進していましたが、主任のポジションを見送られた後、教授になるのは亡くなる二ヶ月前の一九四八年七月でした。優秀な学者として尊敬され、よく知られていたベネディクトでしたが、女性であるだけで大学内では業績に見合う地位を与えられなかったのです。

◆人種主義研究をめぐるトラブル

著作『人種主義』の第一部で、ベネディクトは人種は単なる科学的分類にすぎないということを明らかにし、第二部では人種主義というのは人種に対する差別というより、弱いものに対する差別、あるいは政治的にいじめたいものに対する差別だということを大変わかりやすく説明しています。そして、この著作が出版されると大変な評価を得ます。やがて、アメリカが第二次世界大戦に参戦することになり、人種主義問題は社会的にも大きくとりあげられます。一九四二年、コロンビア大学では人種主義対策の委員会が開かれ、パブリック・アフェアズという教育者と社会科学者の非営利組織が出版する月刊パンフレット・シリーズで、人種主義をとりあげることが決定されました。ベネディクトは同僚のジーン・ウェルトフィッシュ助教授と一緒に *Races of Mankind* という著作を出すことになりました。それは翌一九四三年に出版され、十セントという安い価格で広く求められるようになりました。内容的にも、マンガ入りの口語体で書かれ、人種偏見は不安による恐怖から生まれ近代以降大きくなった社会病理であると説明されています。また、ユダヤ人やアジア人に対する偏見がおもに取り上げられています。アメリカにおける黒人差別にも注目しています。

そこで彼女たちは、第一次世界大戦中、百万人のアメリカ兵を対象にした知能テストを例にあげ、黒人に対する差別の迷信を明らかにしました。テストの分析結果は白人より黒人の知能のスコアが平均的に低いことを示していましたが、その後、知能テスト自体に偏りがあることが証明されました。すなわち、教育機会のある北りうわまわるケースがあることが証明されました。すなわち、教育機会のある北部の黒人は平均すると南部の教育水準の低い白人および黒人よりスコアが上だったので、人種による知能の差より環境による知能の差が示されたことになりました。しかし、このパンフレットの内容が、後にベネディクトをトラブルに巻き込むこととなります。発売後間もなく、米軍慰問協会（USO）はヒトラーのプロパガンダに対抗するため、アメリカの軍人にYMCAをつうじてこのパンフレットを配り始めました。ところが突然、USO会長のチェスター・バーナード（あの近代経営学の祖）が一九四四年一月、USOによる配布にストップをかけたのです。バーナードによれば、USOは国民の税金によって運営されているのだから、このようなマイノリティーに偏向したパンフレットは配布できない、というのです。本当は内容よりその政治的影響を懸念したのでしょうか。しかし彼のコメントが伝わると、マスコミははじめ世間に疑問の声があがりはじめ、二月には事態を重くみ

た陸軍省情宣局 (War Department, Army Morale Division) が、USOをつうじて陸軍の教育將校に配布する予定だったパンフレット五万五千部をワシントンの倉庫に引っ込めてしまったのです (Edwards 1945: 167)。

いったん収まりかけた騒ぎに再び火をつけたのが、下院軍事委員会の委員長でケンタッキー選出のアンドリュー・メイ議員です。三月六日、彼は南部選出議員の声に押され、改めて陸軍への配布を全面的に禁止するように訴えました。しかし、彼の行為は逆効果を生んでしまい、反対に四十あまりの学術団体が、パンフレットの内容は客観的事実を述べておりデモクラシーに貢献する内容だと反論したのです。マス・メディアも、メイ議員の行為は自由や真理を妨害隠蔽するものだとして全国に報道した結果、さまざまな団体がパンフレットを大量に買い上げ、陸軍のみならず国会議員、市民一般にも配布することになりました。特に教会関係者は南部各州に集中的にそれを配布しました。おそらくメイ議員はパンフレットを詳しく読まず、配布中止になった理由もよくわかっていなかったに違いありません。あわてた彼は三月中旬に配布を止めなければ、パンフレットが書かれた政治的背景を暴露すると脅迫めいた発言をしています。選挙を目前に控えていたメイ議員は、白人有権者にアピールしようと必死でした。実際には前の選挙で黒人か

ら七千票を得たおかげで当選したにもかかわらず、追い詰められた彼はどうしてもパンフレット配布を禁止する理由が欲しかったのです。そこで軍事委員会の小委員会で、南部選出の同僚グラム議員にパンフレットについての秘密審議を要求させ、パンフレット作成の意図が不明確で配布に値しないという強引な報告を引き出しました。誤解、中傷だらけの報告であったにもかかわらず、メイ議員は南部選出の議員を代表して、このパンフレットは「共産主義のプロパガンダ」と決めつけたのです。

『人種主義』の方は高く評価されたにもかかわらず、同じ内容がパンフレットになっただけでなぜこれほどまでに非難されたのでしょうか。南部の議員たちの不満は北部の黒人の知能が南部の白人と変わらないという分析内容にありました。彼らはさまざまな反論を試みました。たとえば、このパンフレットの内容は同棲や異なった人種間の結婚を拡大させるであろうとか、著者は共産主義者がよく利用するトピックス、たとえば政治、社会学、労働組合にとらわれて客観性をなくしている、などと難癖をつけ、あげくの果てに挿画のアダムとイブの二人の姿にへそがあるからけしからんなどと「反論」しました。この一見他愛もない苦情のかげには、さらに合理的な動機が隠されていました。それは、知能の差は環境

の問題だとはっきりいわれると、北部に比べて南部では教育費をはじめとする福祉予算が少ないという印象をパンフレットが与えることになりかねず、結局は議員の能力が問題にされることになり困るといふものでした。結局、*Races of Mankind*のパンフレットは百万部以上売れ、広い範囲での知識の普及を達成することができました。そして後にマンガ、教育用の映画、子供の絵本、高校のテキスト、新聞や雑誌の短い記事などとしてこの内容が活かされました (Edwards 1945: 168)。

しかし、皮肉なことに、ベネディクトはそのために逆に差別の根強さを知らされることになりました。憎しみいっぱいの手紙が届き、ユダヤ人やニガー（黒人を指す差別用語）びいきだと非難されたり、国会では共産主義の布教者と呼ばれました (Congressional Record ≪米国の連邦議会議事録、上院≫一九四四年、四四九五〜四五〇〇頁)。パンフレットで述べられた、不平等による恐怖とスケープゴートづくりから人種差別が起こるとの指摘が、見事にベネディクトとウェルトフィッシュにはねかえってきました。共産主義への「恐怖」が政治的に利用され、彼女たちが非難されました。ベネディクトは一九四三年六月から合衆国戦時情報局につとめ、そこで『菊と刀』のベースとなる研究を行うことになるのですが、

着任後まもなく政治信条に関するさまざまな調査がおこなわれ、数ページにわたる回答を求められました。客観性を守ったベネディクトは最終的に信頼に足りる人物と保証されましたが、偏見に真正面からぶつかっていく彼女の勇氣は一部の人々には恐怖でさえあったに違いありません。

しかし、ベネディクトに関するでっちあげは終わりませんでした。戦後、マッカーシズムのもとで反共感情が高まった一九五二―五三年、共著者のウェルトフィッシュは二回も上院国家保安委員会で「破壊活動のプロパガンダ」と烙印されたパシフレットに関する審議に応じなければならず、すでに亡くなっていたベネディクトの政治信条までも問題にされたのです (Pathé 1988: 377)。このような出来事は差別を支える迷信の強さを象徴しています。ベネディクトが明快に説明した迷信そのものが、彼女を叩くために使われてしまいました。しかし彼女の科学的なアプローチへの強い信念は、戦後に日本研究の古典となった『菊と刀』を生む原動力となるのです。以上のようなトラブルが起こっていた時、ベネディクトはもうすでにアメリカの戦時情報局 (Office of War Information) で働いていました。大学でのぎくしゃくもあったため、一九四三年に情報局での文化研究を依頼された際にはすぐイエスと返事しました。しかし、戦時情報局員が「赤」といわれる

ことは重大と受け止められました。先に述べたようにベネディクトの潔白は証明されましたが、国のためにできるだけ科学的で客観的なパンフレットを出したのに、政治的な理由で迫害を経験し、改めて差別やデタラメのプロパガンダの恐ろしさを知ったのでした。

◆米国防時情報局

ベネディクトは戦時情報局でまず東ヨーロッパとタイ、ビルマを調べて、その文化的特徴のレポートをまとめます。彼女は日本という敵国を研究するために情報局に雇われたのだとよくいわれますが、これは間違いです。おそらく、本人は局に入った時、そのうちに日本文化を研究対象にするなどは予想もしていなかったでしょう。最初の一年間、彼女は敵国と味方の文化を研究しました。何故、味方のことを調べる必要があったのかといえますと、アメリカの軍隊がいずれその国にお世話になる時、文化的な違いによって変なトラブルが起こると必然的に「国際問題」になるからです。例えばオランダでアメリカの兵士がかわいい女の子を気軽にデートにさそうかも知れませんが、当時のオランダでは彼女の家まで迎えに行っでご両親に挨拶をすれば、たいてい結婚を申し込んでるように受けとめ

られ、大きなトラブルにエスカレートする可能性があります。だから、このような基本的な文化知識を軍隊のリーダーと兵士のために用意する必要があったのです。

当然、戦争中なのでベネディクトはそれぞれの国に行って調べることができません。そこで彼女は、オランダやルーマニアについて調べる際には、その国で育った人、あるいはその国で長く生活をしたことのある人に面接をしたり、アンケートに答えてもらったりして、できるだけ「生」に近いデータを収集しようと思いました。もちろん、それぞれの国について参考文献を読み、歴史、習慣、制度、儀礼、文学等も調べながら調査に挑みました。だから、ベネディクトは現地でフィールドワークができなくても、かなりよいデータを集めるコツをこの仕事の間に覚えしました。その後の研究対象には、ルーマニア、タイ、ビルマ、北欧、ドイツ、オーストリア、中国、ポーランドなどが含まれました。

◆ 海外戦意分析課 (Foreign Morale Analysis Division)

一九四四年に入ると、戦争の中心がだんだんヨーロッパから太平洋の方へ移ります。そこで日本という敵国について情報を集める必要性が生じ、夏から海外戦

意分析課が設立されます。ここでは日本の軍隊と市民はいつまで戦う気かを予想することが仕事の中心で、文化人類学以外にも、政治学、社会学、心理学、日本のことをよく知っている日系人などの専門家三十人ぐらいが集まって課が構成されました（付録二）。ですから、ベネディクトが一人で日本のことを調べていたのではなく、大きな研究チームで行いましたので、早いペースでたくさんの情報を処理することができました。

海外戦意分析課では、主に海外で捕虜となった日本の兵士の面接データを分析して日本人の考えていることを想定しました。例えば、日本人は天皇についてどう考えているかということも大きな課題でした。何千人のデータのうちの三千人ぐらいが天皇について何かをコメントし、そのうちたったの七人しか悪口を言っていない。ここから日本人にとって天皇が大変重要な存在であることが判明しました。連合軍にとって天皇はヒトラーのような存在で、当然死刑にすべきだと信じていました。しかし海外戦意分析課では、天皇を死刑にすれば日本の社会的秩序が一気になくなるだろうと予測しました。ちょうど終戦前、天皇の問題をどう扱うかを決める会議が行われ、情報局の代表として出席したのがレナード・ドゥーブ (Leonard Doob) という人だったのですが、彼女はベネディクトのことをよく

知っていたしその判断力を尊敬していましたので、ベネディクトに相談しています。ベネディクトは、天皇を死刑にすれば日本人は絶望的になる、ヒトラーと同じように扱うことは事実の単純化にすぎない、などとアドバイスをしました。結局、会議ではプロパガンダで天皇の悪口を言っただけはならない、天皇の死刑は占領に悪影響をもたらすだろうという方向づけがなされ、天皇を特別扱いにする結論となりました。戦後『タイム』誌にベネディクトの記事が載せられた時、見出しは「彼女が天皇を救った」(She saved the Emperor) となっていました。ベネディクトがどこまで決定に影響を与えたのかはつきりしませんが、そのアドバイスが何らかの形で高いレベルに届いたに違いありません。

海外戦意分析課には捕虜の面接以外にも、日本の新聞やラジオ放送、兵士から没収した日記や手紙、あるいはときどき入ってくる軍事機密などの情報が、連合軍の最新情報とともに入ってきました。課では「日本人はどこまで戦う気か」を分析しながら、日本の兵士に「早く降参しよう」というパンフレットやチラシをまきました。日本人に最も説得力のあるメッセージとはどんなものかを探るのも海外戦意分析課の仕事でした。そこでベネディクトは主に新聞報道やラジオ放送を担当していました。アメリカでは日本人はわけの分からない人たちで、天皇の

ために自分の命がなくなるまで戦う恐ろしい敵だ、というイメージが非常に強かったのです。この「わけのわからない日本人」を説明するために、他の研究者は日本人の性格が強迫的なので攻撃的になる (Gorer 1942; LaBarre 1945) とか、アメリカの十代の青年と同じぐらいの精神年齢なので、十代の青年として調べたらわかるだろうとか、暴力団の心理に似ているからギャングと比較できるだろう (Mead 1944) とか、まさに「訳の分からない研究方法」を用いて日本人の性格を解明しようとなりました。つまり、西洋社会で発達した理論や方法を、西洋社会で適用する心理学的な方法と同じように、日本社会に適用しようとすれば、当然、結果的に日本人は「アブノーマル」に見えてきます。しかし、ベネディクトは自分のそれまでやってきた文化人類学の研究から、日本人には安定した文化的なパターンがあるとわかっていたので、日本人の行動をアブノーマルなものとして受け取るのではなく、日本人にとってその行動にどのような意味があるのかということを探ろうとしました。

◆レポート二五号

情報やプロパガンダについてベネディクトは多くのレポートや覚え書きを書き

ましたが、戦争が終わりに近づく、戦後の日本の占領政策についても考える必要があることが明らかになりました。そこで海外戦意分析課では日本人の基本的な文化的行動、あるいは文化的パターン、価値観についてのレポートがあれば大変役に立つだろうと考え、その専門家として認められていたベネディクトにレポートの作成を指示しました。レポートは最終的に五七ページとなり、「レポート二五号―日本の行動パターン」(Report 25: Japanese Behavior Patterns) というタイトルがつけられました。ここでは恩と義理、義務、人情というキータムについて論じられていますが、このレポートが後に書かれる『菊と刀』の原型となります。ベネディクトが海外戦意分析課に入ったのは一九四四年九月上旬で、このレポートが提出されたのは終戦前でした。つまり、ベネディクトが日本文化を研究できる期間はたったの一年間、しかももっと驚くべきことは、このレポートがわずか二カ月ぐらいで書き上げられたことです。レポートの日本語訳は最近出版されましたが(『日本の行動パターン』NHKブックス、一九九七年)、今までその存在についてはあまり知られていなかったのです。ヴァッサー大学の図書館とアメリカの国立公文書館に今でも保存してありますが、『菊と刀』の完成度が高いので調べる必要はないと多くの人が思ってきたようです。しかし、この資料が掘り起

こされたことによって、『菊と刀』がさらに面白く読めるようになったと感じます。情報局で、ベネディクトは限られた情報で、短い間に、様々な文化の特徴を分析する「練習」を重ねていきました。情報を理解するために、まずいろいろな文献で調べてから面接調査でその情報を確認しました。日本文化を研究する際に、彼女が特に頼りにした日系人がロバート・ハシマ (Robert Hashima) です。同僚のハシマはベネディクトがなくなってからその追憶を書いています。それによると、ベネディクトは夏目漱石の『坊っちゃん』を読んだ時に日本人の文化的な特徴についてヒントを得たそうです。彼女は日本人の倫理システムを明らかにしようとしていましたが、そのベースとなっているものは、恩と義理と義務の複雑な関係だと考えついたのです。彼女は早速ハシマにいろいろ具体的な質問をしました。まず、彼女はカギとなる概念について日本語で何というのかと聞き、その言葉がどのような文脈において使われるかを確かめました。彼女は英語に訳された、英語の意味のまま受け取らないで、日本語とその言葉の意味を日本人と同じように理解しようとしていました。そして、ハシマ自身の体験の中で、この恩と義理と義務関係に関するエピソードがあればそれを教えてくれと頼みました。ハシマだけでなく、他の日系人や日本に住んだことのある人にもこのような質問をし

ました。『菊と刀』を読むとたくさんの具体例がでてくることに気がつくでしょう。また、彼女は日本の映画を資料として利用することもありました。映画を見る時に日系人と一緒にみて、彼らが自分と違った反応をする箇所があるとそこをマークし、後で何故日本人がそのような反応をしたのかを探りました。それで、日本人とアメリカ人との根本的な違いについていろいろ理解することができました。ベネディクトはたえず情報をできるだけネイティブに近い人に確認し、あるいは海外戦意分析課の専門スタッフと相談しながらこのレポートを書きました。だから、レポートはチームによって書かれたと言ってもいいでしょう。『菊と刀』の下書きを見ますと第一章ではまず「I」（私）とタイプしてありますが、彼女はその第一章のすべての「I」を鉛筆で「WE」と書き直しています。つまり、このチームで書いたよということを示したかったのだと思います。最終的に出版社は「I」のままにしておくことにしました。

この「レポート二五号」と後に書く『菊と刀』には異なるところがいくつかわかります。まず長さがずいぶん違いますので、同じものではないことがすぐわかります。『菊と刀』では、最初の部分、研究方法と歴史的背景という部分、それから最後の子供のしつけに関する「子供が学ぶ」の各章と最終章を後からつけ加えて

います。それは一般読者のために日本の歴史的な事情や子供の性格形成などを示そうとしたのです。そうすることによって、今まで恐ろしい敵だった日本人は、「訳の分からない奴」ではなく理由があつて行動をする人間なのだ、という説得力のある説明が可能になりました。『菊と刀』を書いた目的は、敵の日本人が実はアメリカ人と同じような人間だということを通じて普通の人に理解してもらふことでした。アメリカの文化的行動についてもたくさん例をだし、アメリカ人に訳の分からない習慣が多くあつても自分たちの文化的文脈内で矛盾がないように、日本人の一見不可解な行動も日本人にとっては合理的なのだということを知らせたかったのです。

これと比べてレポートの目的は違います。レポートは終戦前に書かれていきますので、二つの目的がありました。まず、できるだけ早く戦争を終わらせること、それはもちろんできるだけ人が殺されない方法で。もう一つは、占領軍が日本に入った時に日本人とどのように接したらよいかを明らかにすることでした。そのためには、プロパガンダによって描かれていた日本人像はどこが間違っていたかをはっきりさせる必要があります。つまり、日本人はサルだとか、精神的年齢が低いなどのイメージが強かったのですが、そのイメージで終戦後に日本人に接

したらトラブルが起るだけだからです。そこで彼女が強調したのは日本人の責務体系でした。つまり、その恩、義理、義務などの倫理システムを説明して、ほらこれだけ日本人はモラルの高い国民だ、とアピールしようとしたのです。そして、日本人は状況に応じて行動を変えることが得意なので、きっとこれから平和な世界をつくるために働いてくれるに違いない、とレポートの最後で主張しています。つまり、ベネディクトが言いたかったことは、日本人は一応、理由があって戦争を起こしたのであり、それに対して「アメリカが正しい価値観を教えてやる」という態度で占領したら、何も改善されないということ、できるだけ日本人の立場を理解した上で改革などをめざすべきだということを占領にかかわる人々に印象づけたかったのです。結果から言うと、レポートのメッセージはアメリカ側にもうまく受け入れられ、日本でも『菊と刀』が今でも読まれ続けられているところをみれば、ベネディクトが日本人の行動についてカギとなるところをっていたと言っでよいでしょう。

- Caffrey, Margaret M. 1989 *Ruth Benedict: Stranger in this Land* Austin: University of Texas Press.
- M・カフリー『ちまちまな人』福井七子訳、関西大学出版部、一九七九年。
- Edwards, Violet. 1945 A Note on The Races of Mankind, in Ruth Benedict *Race: Science and Politics*. New York: Compass Books Edition, Revised 1959, pp. 167-168.
- Gorer, Geoffrey. 1948 "Themes in Japanese Culture" 273-290, in *Personal Character and Cultural Milieu*. In Haring, Douglas, ed., New York: Syracuse University Press.
- La Barre, Weston. 1945 Some Observations on Character Structure in the Orient.. The Japanese. *Psychiatry*, 8.3: 319-342.
- Mead, Dr. Margaret, Provisional Analytical Summary of Institute of Pacific Relations Conference on Japanese Character Structure, December 16-17, 1944. (24pp.)
- Mead, Margaret. 1977 (Reprint of 1959 orig.) *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*. Connecticut: Greenwood Press.
- Pathé Ruth E. 1988 "Gene Wellfish" pp. 373-381, in *Women Anthropologists: A Biographical Dictionary*. New York: Greenwood Press.
- ベネディクト、ルース『人種主義 その批判的考察』筒井清忠・寺岡伸悟・筒井清輝 訳、名古屋大学出版会、一九七九年。
- D・ラヒンス『内なる外国「菊と刀」再考』(加地永都子訳)時事通信社、一九七二年。

(付録一)

Ruth Fulton Benedict の経歴

経歴

父 Frederick S. Fulton, 外科医 (一八七二—一八九)

母 Bertrice Shattuck Fulton, 教師、後に司書 (一八〇一—一九三)

一八七六・六・五 ニューヨーク市に生まれる

一八八二—一八九〇 Shenango Valley, ニューヨーク州、母系の祖父・祖母 (John Samuel Shattuck (1827-1913) and Joanna Terry Shattuck (1827-1909)) の Shattuck Farm に生活する

一八八六・三・二六 妹の Margery の誕生

一八九〇・三・二六 父の死

一八九四—一八九五 Norwich, ニューヨーク州、母は教師になり、Hettie Shattuck (母の姉) が家庭の世話をし、二人姉妹が学校に通い始める

一八九五—一八九七 St. Joseph, ミズーリ州、母の仕事でミズーリ州に引越、Aunt Hettie も一緒

一八七二—一八九〇 Owatonna, ミネソタ州、母は Pillsbury Academy の「婦人校長」になり、ミネソタ州に引越、Aunt Hettie も一緒、二人姉妹が Pillsbury Academy に転校

一八九九—一九〇一 バッファロー、ニューヨーク州、母は Buffalo Public Library の司書になり、バッファローに引越、Ellis Family (Aunt Mamie, 母の妹と名の主人 Uncle Will) のアパートの上に住む

一九〇〇 Aunt Hettie の死

一九〇一—一九〇五 二人姉妹が St. Margaret's School for Girls に転校

一九〇五—一九〇九 二人姉妹が Vassar College に通ふ

- 一九〇一—一九一〇
ルースはKatherine NortonとElizabeth Atsatt (カリフォルニア州出身)とヨーロッパの旅行、妹のMargeryがRobert Freemanと結婚
- 一九一〇—一九一一
パッサファロー、ニューヨーク州、ルースは母と生活し、Charity Organization Societyに勤める
- 一九一二
ロス・アンジェルズ (カリフォルニア州) ルースはWestlake School for Girlsに教え、母は次女のMargery FreemanとPasadena (カリフォルニア州)に生活する
- 一九一三—一九一四
パサディナ (カリフォルニア州) ルースはOrton School for Girlsに教え
- 一九一四・夏
Stanley R. BenedictとShattuck Farmに結婚式をあげる
- 一九一四
ニューヨークに住み、後にルースはボランティヤとしてState Charity Aid Associationに働く
- 一九一九—一九二二
New School for Social Researchの聴講生になり、人類学者のElsie Clews ParsonsとAlexander Goldenweiserの授業を受ける
- 一九二二—一九二三
コロンビア大学に編入、人類学のPh.D.を3 Semesterで取得
- 一九二三—一九二四
ボアズの助手としてBarnard Collegeに教える
- 一九二四—一九二五
コロンビア大学で人類学の非常勤講師になる(ずっと一年単位での契約)
- 一九二五—一九二六
コロンビア大学 Extension (サマー・スクール)にFine Artsを教える
- 一九二六・夏
Stanleyとヨーロッパを旅行する、International Congress of Americanists in Romeにも出席
- 一九二六—一九二七
Barnard Collegeで人類学の非常勤講師を務める (Gladys Reichardの代わりに)
- 一九二七
Stanleyと同居
- 一九二七—一九二八
コロンビア大学、人類学専任講師
- 一九二八—一九三〇
『サイエンス』誌はベネディクトをアメリカでのトップ5人の人類学者の一人として選ぶ

- 一九三三
一九四〇・〇一
一九四〇・二一・二八
一九三三・九
一九三六
一九三六・七一
一九三六・一一・二
一九三七・一九四六
一九三七・一九三九
一九三六・夏
一九三九・九
一九三九・一九四〇
一九四一
一九四二
一九四三
一九四三
一九四三・一九四五
一九四一・一九四五
一九四一
一九四五・八
- 『タイム』誌はアメリカのトップ科学者の三人の一人としてベネディクトの名前を挙げる
Patterns of Culture (『文化の型』) が出版される
 The New York Academy of Sciences の Fellow として選ばれる
Zuni Mythology が出版される
 Stanley Benedict の死
 人類学科の主任代理になる (一年間)
 コロンビア大学の哲学・政治学部でテニアを得る
 コロンビア大学、人類学科の助教授
 人類学科の主任
 Guatemala への旅
 Ralph Linton は人類学科の主任教授になる
 サバチイカルをとり、パサディナ、カリフォルニア州で *Race: Science and Politics* (1940)
 (『人種主義 その批判的な考察』) を書く
 Bryn Mawr College: Anna Howard Shaw Memorial 講師 (9週間) シナジー (synergy) にこの講義)
 Shattuck Farm のほとんどもを売り、所有していた牧場の家を改築し、そこで Aunt My (Myra Shattuck, 母の妹) が住み、ベネディクトはそこで休みを過ごす。
 パンフレット *Races of Mankind* が出版される
 ワシントン、戦争情報局、海外情報部、基礎分析の長
 戦争情報局、海外戦意分析課、社会科学分析者 兼任、Washington School of Psychiatry の非常勤講師
 Aunt My の死

一九四二-四六 休暇を取り、パサディナ（カリフォルニア州）で *The Chrysanthemum and the Sword*,

(1946) 『菊と刀』を書く

一九四三 コロンビア大学に戻る

一九四四 Columbia University Research in Contemporary Cultures の所長 (Office of Naval Research Contract for Cultural Study of Certain Minorities of European and Asiatic Origin in New York City)

一九四八・四九 コロンビア大学、人類学科の教授になる

夏 UNESCO Seminar at Podbrady Czechoslovakia; ヨーロッパ旅行

ナ・モ ルース・シネマ・テクニクの死、ニューヨーク市

学位、賞、役職

一九四一 B.A., Vassar College, Phi Beta Kappa

一九四三 Ph.D., Columbia University

一九四一-四三 President, American Ethnological Association

一九四四 Fellow, New York Academy of Sciences

一九四四 Award of the C.I.O. Committee to Abolish Racial Discrimination

一九四四 Fellow, Washington School of Psychiatry

一九四六 Vice President, American Psychopathological Association

American Design Award for War Services

Achievement Award, American Association of University Women

一九四一-四三 President, American Anthropological Association

一九四四 Fellow, American Academy of Arts and Sciences

D.Sc., Russell Sage College
 Award of the New York Committee of the Southern Conference of Human Welfare
 Posthumous award of the Institute of Design of Illinois Institute of Technology (for
 film *Brotherhood of Man*, based on pamphlet *Races of Mankind*, written with Gene
 Weltfish.)

編集

- 一九三〇-一九三二 編集者' *Journal of American Folk-Lore*.
- 一九三二-一九三〇 編集者' Columbia University Contributions to Anthropology.
- 一九三二-一九三三 編集者' *Character and Personality*.
- 一九三二-一九三三 編集者' *Frontiers of Democracy*, P.F.A.
- 一九三二-一九三三 編集者' *American Scholar*.
- 一九三三 編集者' *Psychiatry*.
- 一九三三 編集者' William Alanson White Psychiatric Foundations.

フィールドワーク

- 一九三三 Serrano.
- 一九三三 Zuni.
- 一九三三 Zuni and Cochiti.
- 一九三三 Pima.
- 一九三三 Mescalero Apache, student training direction under auspices of Southwest Laboratory
 of Anthropology, Santa Fe.

1236 Blackfoot, student training direction under joint auspices of Columbia University and University of Montana.

著書の中ノケルン

1233 "The Concept of the Guardian Spirit in North America," *Memoirs of the American Anthropological Association*, XXIX: 1-97.

1231 *Tales of the Cochiti Indians*. Bureau of American Ethnology, Bulletin XCVIII. Washington.

1230 *Patterns of Culture*. Boston and New York, Houghton Mifflin. 『文化の型』

1228 *Zuni Mythology*, 2 vols., Columbia University Contributions to Anthropology, XXI. New York, Columbia University Press.

1220 *Race: Science and Politics*. New York, Modern Age Books. (Rev. ed. with Races of Mankind, New York, Viking, 1945.) 『人種主義 への批判的考察』

1218 *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Boston and New York, Houghton Mifflin. 『桜と刀』

(Mary E. Chandler for "Ruth Fulton Benedict, 1887-1948," by Margaret Mead, *American Anthropologist*, Vol. LI, No. 3 (1949): 457-68; Margaret Mead, *An Anthropologist at Work*, Greenwood Press, 1977 (絶版))

(付録1)

*Office of War Information, Bureau of Overseas Information,
Foreign Morale Analysis Division (FMAD)*
戦時情報局、海外局、海外戦意分析課のメンバー

Sponsoring Committee

Dr. George E. Taylor (Historian, Far East) Deputy Director for the Far East, OWI
Colonel John Wesley Coulter (Human Geography) Chief of the Sociological Branch, Military Intelligence Service, War Department General Staff
Colonel E. W. Gibson (Lawyer / Republican Senator) Supervisor of Research, Military Intelligence Service, War Department General Staff
Dr. Harold M. Vinacke (Historian, Far East) Chief of the Japan Section, OWI

FMAD Members

Personnel from the OWI

Dr. Clyde Kluckhohn	(Anthropology)	Co-Chief of the Division
Dr. Morris Edward Opler	(Anthropology)	Assistant Chief
Dr. Ruth Benedict	(Anthropology)	Senior Analyst
Dr. John Embree	(Anthropology)	Senior Analyst
Dr. Frederick Hulse	(Anthropology)	Senior Analyst
Dr. Dorothea C. Leighton	(Psychiatry & Anthropology)	Senior Analyst
William M. Doerflinger	(Journalism)	Editor

Dr. Katherine Spencer	(Anthropology)	Analyst, Supervisor of Processing
Royal Hassrick	(Anthropology)	Analyst & Processing
Iwao Ishino	(Community Analysis, Public Opinion Surveys, Japanese Culture)	Analyst & Processing
Dr. Herman Spitzer	(Psychoanalysis)	Analyst
Dr. Elliot Fisher	(Sociology)	Analyst & Processor
Yoshiharu Matsumoto	(Community Analysis, Japanese Language & Culture)	Analyst & Processor
Tom T. Sasaki	(Community Analysis, Japanese Culture)	Analyst & Processor
Toshio Yatsushiro	(Community Analysis, Public Opinion Surveys, Japanese Culture)	Analyst & Processor
Robert S Hashima	(Japanese Language & Culture)	Translator, Analyst & Processor
Rose Matsumoto	(Japanese Language & Culture)	Translator, & Processor
Florence Mohri		Division Secretary & Stenographer
Frances Payne		Division Secretary & Stenographer
Atsuko Aoki		Translator, Typist
Helen Holt		Clerk, Typist
Mrs. Edna L. Quillin		Clerk (Research Assistant to RFB)

Personnel from Sociological Branch, Military Intelligence Service, War Dept. General Staff (MIS)
 Lt. Col. Felix E. Moore, Jr. (Sociology & Statistics) Chief, Japan Section, Sociological Branch
 Tech. Sgt. David F. Aberle (Anthropology) Propaganda Analyst

Tech. Sgt. Y. B. Goto	(Japanese Language & Culture)	Translator / Analyst
M/ Sgt. Keith Kaneshiro	(Japanese Language & Culture)	Translator / Analyst
Agnes W. Brewster	(Sociology)	Propaganda Analyst
Mary E. Maltman	(Sociology)	Propaganda Analyst (Part-time)
Dr. George D. McJinsey	(English Literature)	Analyst & Processor
Edward K. Merat	(Political Science)	Propaganda Analyst
Jerodene E. Tuck		Clerk, Typist (Part-time)
Roberta Garner		Clerk, Typist (Part-time)

Personnel from the Navy

Commander Alexander H. Leighton * <i>Chief of Division</i>	Psychiatry & Anthropology
Lt. Marion Levy, Jr.	Sociology
Commander George Townsend Lodge	Psychology

Special Consultants (Sponsoring Committee)

Dr. Owen Latimore	Far East
Dr. Charles Hepner	Japanese Language & Culture
John M. Maki	Japanese Political Affairs

Liaison

Dr. Florence Kluckhohn	(Sociology)	Liaison with Office of Deputy Director for the Far East in the OWI
------------------------	-------------	--

発表を終えて

『菊と刀』は多くの日本人に知られている著作ですが、実際にこの本を通読している人、あるいは著者のルース・ベネディクトについて何かを知っている人は意外に少ないようです。その意味で、日本研究において大変重要な位置を占めているこの本の裏話を一般の方々に聞いていただくことによって、ベネディクトのおもしろさだけでなく、戦後の日本文化論のルーツについても知っていただくことになればと思います、お話しさせていただきました。

日文研が長い間このような場を提供することによって、一般の多くの人に研究のおもしろさにふれる機会を作っているのは、地道ながらも日文研のもう一つの重要な役割だと思います。今後も、知識生産の象牙の塔にとどまることなく、市民に開かれたセンターであることを願っています。

ホーリン ケント

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST III 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考ー『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 -科挙制度をめぐって-
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質-
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミターージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミターージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「沢尻栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧⑩	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュースナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての－考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前記に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 『『菊と刀』のうら話』
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーゼン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア モネ Livia MONNET (スイス・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール モスク Carl MOSK (アメリカ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修行」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者—一休宗純とその文学」

105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才ー語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間にー金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ー 詩的イメージとしての典故 ー」

○は報告書既刊

発行日 1998年9月15日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1998 国際日本文化研究センター

■ 日時

1997年9月9日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

